

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 5 月 19 日現在

機関番号：11301

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2016

課題番号：26870037

研究課題名(和文) 韓国地域社会における社会関係資本の生成・変化とローカリティ構築に関する実証的研究

研究課題名(英文) The empirical study on the production and change of the social capital and the creation of locality in a South Korean community

研究代表者

金 賢貞 (KIM, HYEON-JEONG)

東北大学・東北アジア研究センター・助教

研究者番号：20638853

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、日本統治時代に「日本人移住漁村」が作られた韓国九龍浦の近代史及び現在のあり方を日韓両国で実施した文献調査及びフィールド資料に基づいて明らかにした。韓国における日本人移住漁村に関する研究が建築学的研究に偏っているなか、本研究の重要性と意義が認められる。また、九龍浦から日本に引き揚げた日本人たちが作った「九龍浦会」と会員個々人の九龍浦に対する意識や感情、当時に対する評価も深く考察できた。他に、日韓のマスメディアから注目されてきた「九龍浦近代文化歴史通り」の報道の問題や最近その名称が変わった背景など、今後新たな研究として発展できる研究上の重要な示唆点を多数得ることができた。

研究成果の概要(英文)：This study explored the modern history and the present of Guryongpo where is one of port towns in South Korea and “Japanese immigrant fishing town” existed between the late 19th century and the early 20th century based on literature survey and field materials implemented in both Japan and Korea. The importance and significance of the study can be found from the truth that the research on Japanese immigrant fishing towns in South Korea was implemented by the architectural studies only. In addition, how the “Hometown Guryongpo Gathering” was organized by the Japanese who withdrew from Guryongpo to Japan and how the members think and have the feelings about Guryongpo were deeply considered. Through this study a number of important research indications is obtained such as the problem of mass media and the change of the public name of the main tourist spot.

研究分野：地域研究

キーワード：韓国 日本式建築物 観光資源化 社会関係資本 ナショナリズム

1. 研究開始当初の背景

(1) 韓国農村に対する構造・機能主義的研究の蓄積、膠着するフィールドの問題

戦後、長期的・集中的現地調査に基づく韓国の地域研究は、1970年代以降、Brandtや伊藤亜人等、人類学者による農漁村調査研究に始まり、主導された。その特色は、当時の人文社会科学の中心理論だった構造・機能主義に立脚した儒教、血縁に規定される家族・親族(門中・宗族)や祖先祭祀、これらの対極にあるが、韓国の基層文化とされた民間信仰(主に巫俗)、つまり、容易に変化しない韓国社会の基本構造や特徴を究明しようとした点にある。しかし、既に始まっていた韓国の都市化・産業化により、韓国の伝統的村落という調査地の措定や上述の分析視角は有効性を失い、韓国社会の変化や動態を論じるための新しい方法論と事例研究が求められた。そこで登場したのが、地域開発を進める中央集権的国家(ナショナルな政策)と地域社会の関係、具体的には文化伝統の変化や、個人(ブローカーや地方有志)に着目した韓国社会の開発論や威信論である。新しい分析視角による以上の研究には重要な共通点と限界がある。それは、こういう新たなアプローチが従来のフィールドや事例をめぐってのみ適用されており、実際、もっと多様であるはずの韓国の地域社会に対する現地調査や事例分析はあまり行われていないということである。とはいえ、近年、移動、集合団地、露店商、大衆文化、朝鮮族といったエスニック・マイノリティ、韓国女性ジェンダー等、現代韓国を取り巻く様々な社会文化的変化を反映し、研究対象は広がった。しかし、嶋睦典彦も指摘するように、徹底したフィールドワークに基づく地域研究は明らかに減りつつある。

(2) 周縁化する「日本人移住漁村」、社会科学的地域研究の不在

本研究の調査地は、韓国の首都ソウル市から南東へ約300km離れ、東海(日本海)に面した慶尚北道浦項市九龍浦邑(行政単位)であり、九龍浦港を中心とする九龍浦地域は、19世紀末~20世紀初頭にかけて日本の香川県や愛媛県等の漁師らが移住し、街区整備、公共機関の設置、大規模な築港が行われ、当時、韓国東海岸を代表する大きな港町として発展した。この地域を本研究のフィールドに措定した経緯・理由は、次のとおりである。

筆者は、韓国文化財庁委託調査研究「韓国重要無形文化財の管理改善及び拡大について」(2008)等の共同研究員及び「文化財保護制度における世界遺産条約の戦略的受容と運用に関する日韓比較」(代表者:岩本通弥、基盤B20320133)の研究協力者として韓国の文化財保護法の推移(改訂)を研究し、特に2001年から導入された登録文化財制度、つまり、「指定文化財ではない文化財のうち、

建設・製作・形成されてから50年以上経過したもの」で、歴史・文化・社会等の分野で記念的・象徴的価値のある「近代遺産」を「文化財」に登録保存し、積極的な活用を図るための枠組みに注目した。そして、韓国群山市を事例に本制度成立の社会文化的意味や思想的背景を論じ、さらに、それまでの研究をマクロな比較検討の上でマッピングし、発展させるため、「現代韓国のまちづくりにおける負の遺産とガバナンスに関する調査研究」(代表者:金賢貞、研究活動スタート支援24820006)を遂行した。その結果として明らかになったのは、激論の末に保存・活用が決まった京城府庁(1926年建立)の「ソウル図書館」化、日本第一銀行仁川支店(1899)の「仁川開港博物館」化、東洋拓殖株式会社木浦支店(1920)の「木浦近代歴史館」化等の事例は、それまで公共・商業施設に使われたが、用途のなくなった建物を行政(市)が買い取り、ローカルな近代史を展示・解説する場に変えただけで、点の保存、言い換えれば、マテリアルな保存が前景化している現状である。ただ、政策理念と遊離し地元住民との協働がほとんど見られないソウル市や仁川市等とは違い、日本式民家の集合地を「近代文化歴史通り」として面的保存・活用を図る浦項市九龍浦は、住民を巻き込む形でまちづくりが進行してきた。日本人移住漁村として開拓された九龍浦は、近代遺産への再評価と制度的資源化が行われるまで、例えば韓国建築学史のうち近代史が空白であったように、依然として「韓国的」社会構造や文化を前提にその特徴と変化を捉えようとする社会科学的地域研究において、日韓を問わず、ほとんど注目されなかった。恐らく、近代日本人移住漁村の集住地と日本式住宅の空間構造に焦点を当てた布野修司らによる建築学的研究が、九龍浦を取り上げた唯一の調査研究であろう(韓国には同メンバーを含む清州大・建築研究室の『近代都市住宅実測調査報告書(九龍浦邑)』[2003]がある)。

本研究では、これまでの研究成果を踏まえ、生活空間に利用されている日本式民家や居住者としての住民を巻き込みながら進んだ近代文化歴史通りというまちづくりの立案・合意形成・進行・管理のプロセスに着目し、住民たちのかかわり方(社会集団の形成)と具体的な実践(社会文化的活動)を「社会関係資本」の生成・変化というパースペクティブから分析し、社会変動によって強いられるローカリティではなく、問われ続けるローカリティとしての九龍浦らしさがいかに創られているか、解明することを目指したい。

2. 研究の目的

(1) まず、郷土史誌『迎日郡史』(1990)、『浦項市史』(2010)、『九龍浦に生きた』(2009、日本語版『九龍浦に生きた韓国内の日本人村』)や、九龍浦への日本人移住記録を日本国

内調査（香川県、福岡県等）を通して『志度町史』（1970）、『香川県海外出漁史』（1967）、『大島村史』（1963）、『日生町誌』（1972）等から収集し、特に、九龍浦の住民や日本人移住者 2～3 世から問題を指摘された『九龍浦に生きた』の内容と照らし合わせ、郷土史誌の記述を検証する。

（2）筆者はこれまで地縁性・伝承性の強いアソシエーションとして日本の町内会や神社祭祀集団を中心に研究してきた。九龍浦予備調査の成果から考えると、そのような地域集団はきわめて脆弱化していると推察される。そのため、地域社会が住民の帰属を規定するのではなく、住民のボランティア行為によって自らを地域社会に位置づけ、このボランティア行為は「了解」を志向する当事者間のコミュニケーション的行為（communicative act）と考える新しい認識枠組みに基づき、洞会等の土着的集団やセマウル協議会等の制度的集団に加え、地域発展推進会等の自発的集団の構成や人間関係とそれぞれの活動を綿密に調査分析する。さらに、重要なのは、これらの社会集団間のネットワークであり、コア・アクター（core actor）としての「個人」の実践であると認識し、様々な個人の実践にも注目したい。

（3）周縁化する地域社会については、社会学者らによる比較的マクロなレベルでの検討も必要だが、グローバルな社会・文化の画一化に対するカウンターアクションとしての個別化という意味での地域的アイデンティティを求める諸活動から照射することで、よりミクロな分析が可能になる。本研究では、九龍浦をめぐる多様な外部社会や外部の人たちとの絶え間ない相互作用によって自覚・確認され、議論され続ける内容を、具体的には郷土史家や文化観光解説士（ボランティア・グループ）らの実践を通して検討し、そこから生み出される九龍浦らしさの集合的認識のあり方を考察する。

3. 研究の方法

平成 26～28 年度の 3 年間、次の 5 つの作業を段階的に実施する。（1）九龍浦に関する各種文献資料を韓国・日本の両国間で収集・整理する。（2）植民地時代に九龍浦に移住し、戦後日本に帰国した移住者の集まり「九龍浦会」（2・3 世が中心）の会員に対して面接調査を行い、会発足・経過・現状や、今の九龍浦住民との交流の始まりや意義を明らかにするとともに、個人所蔵の資料を幅広く調べ、九龍浦の近代史調査作業を補足する。

（3）九龍浦の多様な社会集団を、土着的・制度的・自発的なものに暫定的に分類し、その構成・人間関係・活動を中心に検討し、各社会集団間の人的交流としてのネットワークを個人に着目して分析する。（4）日本式

住宅内の生活文化を、モノの配置と生活適応の観点から調べ、内部空間を写真記録する。

（5）以上の作業の結果を、九龍浦のローカリティ構築の観点から考察し、必要に応じて補足調査する。

4. 研究成果

第一に、日本人移住漁村として 19 世紀末から 20 世紀初頭にかけてそのあり方を変えた九龍浦の当時の近代史を、関連文献資料及び、日本統治時代に九龍浦に移住し、戦後日本に帰国した移住者の集まり「九龍浦会」の会員たちが作った会誌や会員らの個人的写真などを収集し、明らかにすることができた。

朝鮮王朝時代（1392～1897）の九龍浦一帯には国営牧場の「長鬢牧場」が設置され、監牧官の下の牧子軍 244 人が牧場内の馬 1008 匹を飼育したと伝えられる。主に馬飼いが集住した九龍浦で漁業は積極的に営まれなかったと推察されるが、日本人漁師の移住によって 19 世紀後半から 20 世紀前半にかけて九龍浦の生業・生活環境は大きく変貌した。香川県出身と伝えられる 3 世帯が 1910 年に慶尚南道蔚山の方魚津から転住して以来、移住者が増え始め、1912 年には 47 戸からなる日本人移住漁村が作られた。以後、役所、警察署、学校などのほか、本町通りと呼ばれた中心市街地には医院、薬局、旅館、料亭、洋服店、時計店、理髪店、美容室、畳店、蒲鉾店、和洋菓子店、米穀商、豆腐店、中華料理屋等、約 200 軒の商店ができ、経済的に活性化していたと考えられる。このような当時の日本人移住漁村としての成立の歴史や経済的状況、社会関係などを中心に明らかにした。

第二に、九龍浦のまちづくりから見出される社会集団間のネットワークや個人のかかわり方を究明することができた。特に注目されるのは 2008 年に九龍浦住民や出身者たちが立ち上げた NPO「九龍浦未来社会研究所」である。市からの運営費の補助はなく、会費のみで運営されてきた同 NPO は 2015 年から九龍浦住民による観光ボランティアガイドの養成に取り組み始めている。これは、九龍浦の歴史や文化をよく知らない九龍浦外＝浦項市内出身の人たちが「浦項市」の文化観光解説士として教育を受け、九龍浦の観光地に派遣され、九龍浦の歴史や文化について語るという仕組みに対する地元からの積極的な対応と考えられる。ローカル・アイデンティティに対する認識につながるこのような地元住民による民間団体の活動や個人の実践は今後も注目していく必要があるだろう。

第三に、九龍浦らしさの集合的認識のあり方を分析することができた。まず、九龍浦の郷土史家たちの活動と歴史観を調べ、それがどのように流用されているのかを明らかにした。特に、「九龍浦近代文化歴史通り」という、九龍浦における負の遺産ともいえる日

本式建築物の観光資源化において彼らの活動やディスコースがいかにか位置づけられ、解釈されているのかに焦点を当てて分析した。さらに、異なる社会的属性を有する地元の住民たちが「九龍浦近代文化歴史通り」という観光事業にどのようにかわり、評価しているのか、その認識についてインタビュー調査を通して調べることができた。また、当該観光事業によってできた観光地で「文化観光解説士」として活動している約 10 人にインタビュー調査を行うとともに、解説の内容を記録し、それぞれの解説の特徴を導き出した。特に、九龍浦の住民から見ると、よそ者でしかない文化観光解説士たちと地元住民たちとのかわり方にも注目して分析を行った。

本研究成果は以上のようにまとめられ、当初予定していた研究目的を達成することができたと考えている。本研究は、日本統治時代に「日本人移住漁村」が作られた韓国の港町の近代史及び現在のあり方を日韓両国で実施した文献調査及び現地調査で得たフィールド資料に基づいて究明している。韓国における日本人移住漁村に関する研究が専ら建築学的研究のみに偏っているなか、本研究の重要性と意義は認められるだろう。また、九龍浦から日本に引き揚げた日本人たちが作った「九龍浦会」と会員個々人の九龍浦に対する意識や感情、当時に対する評価をも深く調べることができた。他に、日韓のマスメディアから注目されてきた「九龍浦近代文化歴史通り」の報道の問題や最近「日本人家屋通り」に名称が変わった背景など、今後新たな研究として発展できる研究上の重要な示唆点を多数得ることができた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 2 件)

- ①金賢貞、韓国民俗学は「当たり前」を捉えるか—韓国国立民俗博物館の 2 つの民俗誌 (2007~14 年) を中心に—、日常と文化、査読無、2 号、2016、pp. 583-607
- ②Hyeon-Jeong KIM, Making Korean Modern Museums: Japanese Colonial Buildings as Heritage and Resource, *ACTA KOREANA*, 査読有, Volume 17, No. 2, 2014, pp. 583 - 607

[学会発表] (計 6 件)

- ①Hyeon-Jeong KIM, Displaying Negative Heritage in Contemporary South Korea: Change of Evaluation of Japanese Colonial Architecture and Negotiating Dissonance, The Russia Japan Workshop 2017: Asian Studies at NSU and TUII, 東北大学 (宮城県・仙台市), 招待講演, 2017.02.10
- ②Hyeon-Jeong KIM, Who Needs the Shi

shifuri Lion Dance?: Interpretations and Changes to Intangible Cultural Heritage after the Great East Japan Earthquake, Association for Asian Studies 'AAS-in-ASIA conference (Kyoto, 2016) 'Asia in Motion: Horizons of Hope', 同志社大学 (京都府・京都市), 査読有, 2016.06.26

- ③金賢貞、現代韓国における日本式建築物の観光資源化—「九龍浦近代文化歴史通り」を事例に一、日本民俗学会第 67 回年会ミニシンポジウム「日本のなかの東アジア、東アジアのなかの日本: 民俗学から多文化を考える」、関西学院大学 (兵庫県・西宮市)、査読無、2015.10.11
- ④金賢貞、韓国の植民地期開発地域における景観の資源化—全羅北道群山市を事例に一、東北大学東北アジア研究センター2014 年度公募型共同研究「日本と韓国における村落の歴史と景観」研究会、一橋大学 (東京都・国立市)、査読無、2015.02.19
- ⑤金賢貞、負の歴史遺産とダークツーリズム—韓国群山(Gunsan)市の日本植民地期建築物の保存と資源化を事例に一、国際シンポジウム「記憶の場としての東アジア」、華東師範大学、上海市 (中国)、査読無、2014.08.30
- ⑥Hyeon-Jeong KIM, Making Modern History Museums: Colonial Architecture as Heritage and Resource in Contemporary Korea, The 7th Kyujanggak International Symposium on Korean Studies 'East Asian Print Culture and Archives: Formation and Dissemination of knowledge', ソウル大学校, ソウル市 (韓国)、査読有・招待有、2014.08.21

[その他]

ホームページ等

<http://www.cneas.tohoku.ac.jp/img/handbook/news02e.pdf>

<http://www.cneas.tohoku.ac.jp/gon2/konwakai/i/u/63.pdf>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

金 賢貞 (KIM, HYEON-JEONG)

東北大学・東北アジア研究センター・助教
研究者番号: 20638853